

資料Ⅰ ワークショップの目的と方法

ワークショップの目的

たまたま出会った図書担当職員同士で、仮想の学校空間を作り出し、学校図書館の授業活用のアイデアを作っていくワークショップに取り組むことを通して、学校図書館の活用の仕方を体験的に学ぶとともに、各学校で行う研修や実践に変化をつけることができるようになる。

ワークショップのテーマ

「学校図書館を効果的に授業で活用するには」

どの学校にも既に学校図書館は設置されています。また、学校図書館を活用するための全体計画も多くの学校経営案に示されています。今後活用するだけの資源（リソース）は、既に学校にあるとってよいでしょう。このワークショップを通して、「今ある学校図書館の全体計画を見直し、改善していくための視点」を学びましょう。

今後学校図書館に求められる役割は何だろうかと問われると、読書センターとしての機能はもとより、情報センターと学習センターといった機能が思い浮かびます。特に学習センターとしての機能の充実を図ることが求められるようになりました。そう考えると、学校図書館を活用した授業実践がパッと思い浮かびます。

これまでも、授業実践は行われてきています。ただし、そのとき関係している先生方によって推進されてきているため、学校図書館を活用した授業実践に係る研修のやり方は、共通理解されていないのが現状ではないでしょうか。

今回、学校図書館担当の職員が授業実践につなげるためのワークショップを行うことで、**北部管内の中学校では、いつでも・どこでも学校図書館の授業活用についての研修を行うことができるようになります。**そうなることで、学校図書館の全体計画を全職員が見直し、改善し、学校図書館を活用する変換点にしたいと考えています。

ワークショップの方法

- (1) 課題の共有 【学校図書館の授業活用を進める上での課題の共有】
- (2) 仲間作り 【メンバー同士の自己紹介（今年一番の失敗した出来事）】
- (3) 「〇〇力」づくり【育てたい力の創造と共有】
- (4) 役割設定 【役割設定】
- (5) 行動づくり 【力が発揮されたときの具体的行動づくり】
- (6) シェアリング【チーム内での発表・議論・共有】
- (7) まとめ 【授業活用に向けて】

学校で実際にワークショップを実施する場合も、上記のような方法で進めることができます。今回のワークショップはそのシミュレーションとしての位置づけでも構いません。今回用いたプレゼンテーション、資料等は全てパッケージとして提供します。是非、学校図書館の授業活用に係る研修を各学校で実践してほしいと思います。

資料2 「学校図書館の担当者って誰？」

学校図書館の担当になると多くの悩みを抱えることになります。

「学校図書館を活用するって一体どういうことなの？」

「日本一の読書県って、そもそもどんな状態なの？」

「図書委員会（学習委員会）を運営する係なの？」

「環境整備してれば、学校図書館を運営していることになるの？」

「学習センター・情報センターとして活用するにはどうやればいいの？」

「そもそも、なんで学校図書館なの。」

「児童生徒の読書量が増えれば、私たちの仕事は成功なの？」

といった多くの悩みが学校図書館の担当者に押し寄せてきます。

ところで、「学校図書館の担当者」とは、いったい、誰でしょうか。

おそらく真っ先に挙がるのは、「校務分掌上、学校図書館の担当になっている先生」ではないでしょうか。しかし、「校務分掌上、学校図書館の担当になっている先生」が「学校図書館の担当者」と同じであるわけではありません。

文部科学省は、「これからの学校図書館の活用の在り方等について（審議会経過報告）」の中で「授業における学校図書館の活用については、教科書等によってもその活用の度合いに大きな差があるが、「言語活動の充実」は、各教科書等の指導全体を通じて推進していくものであり、従来から活用が進んでいる教科書等だけでなく、様々な教科書等における活用を促進していくことが必要である。」と示しています。

そう考えると、学校図書館の活用は「学校図書館の担当者だけが考える」ではなく、「学校にいるスタッフ全員が“担当者”となって取り組むもの」であるといえます。

「学校図書館の担当者」とは「その学校にいるスタッフ全員」なのです。だからこそ、みんなで悩み、みんなで考え、みんなで実践するのです。

資料3 「学校図書館でできることってどんなこと？」

各教科等の授業を改善し、充実させる上で、学校図書館が教員サポート機能を発揮していくことはとても大切です。これまでは、難しい部分もあったのですが、近年、各学校・市町村教育委員会等の努力により、図書館の教員サポート機能を格段に向上させることが可能な状況になってきています。

例えば、無償で図書館の蔵書情報を共有できるシステムが全国で普及しています。<http://calil.jp>
こちらは、学校図書館においても、学校向け蔵書検索サービスの無償提供がなされています。

また、学校図書館をとおして図書の貸し出しサービスを行っている市町村の公共図書館も増えてきました。こういった動きもあって、学校図書館をいかに活用していくかということを私たちは考えなくてはなりません。

では、学校図書館の活用によって子どもに育まれる力は、どのような力なのでしょう。「生きる力」「人間力」「読解力」「コミュニケーション力」「やり抜く力」「表現力」「思考力」「判断力」「想像力」「創造力」「傾聴力」など、考えていけばまだまだたくさんの「〇〇力」は出てきそうです。それらの言葉は、短くまとめられていて、分かりやすいものです。

しかし、だからこそ注意が必要でもあります。

ここで、私たちが考えるべきことは、「その力が発揮されたときには、子どもたちにどのような具体的な行動が見られるのか。」「その力が発揮されることで、子どもたちのどのような行動が増えることを期待したいのか。」ということです。このことを考えていくことで、はじめて「〇〇力」が具体性をもって理解されるようになるのです。

資料4 「Ability と Competency」

「〇〇力」が発揮されたときの行動について考えるためには、Ability（アビリティ）と Competency（コンピテンシー）の違いを捉えることが有効です。

Ability は「学習して獲得した知識やスキル、学力」を指します。一方で、Competency は「成果につながるか」という視点で能力を見る言葉です。

たとえば、英語をネイティブ並みに話せる能力は Ability です。しかし、英語を使ってコミュニケーションがうまくとれなかったり、ビジネスの場で商談をうまくまとめられなかったりすれば、Competency は低いと見なされます。

このことは、日々の教育活動をつくっていくときの大きなヒントになります。私たち教師が「これからの子どもたちには『〇〇力』をつけていくことが必要だ。」「そうだ。」と、合意を形成したとします。そして、「さあ、今年度はみんなで『〇〇力』を身に付けられるようにしよう。」と様々な教育活動を展開します。年度途中で、その教育活動の進捗状況を見直そうとするとき、「子どもたちの『〇〇力』はどれくらい高まったのだろう。」「子どもたちの『〇〇力』が高まったかどうかを、どうやって評価すればよいのだろう。」といった疑問が沸きあがってきます。

そこで、先ほどの Ability と Competency の違いに目を向けてみます。すなわち、「『〇〇力』が発揮されたとき、子どもたちはどのような成果を生み出すことができるだろうか？」と問うてみるのです。「成果」という言葉が学校という場にそぐわないのであれば、「行動」という言葉で置き換えてみるのはどうでしょうか。すると、先ほどの問いは「どのような行動が多く見られるようになったとき、『〇〇力』が発揮されたと見なすことができるだろうか？」という問いへと変換されていきます。このように捉えてみると、これまで大まかで曖昧だった「〇〇力」が、具体的なイメージを伴ったものとして見えてくるのではないのでしょうか。

資料5-1 ワーク① あなたが「育てたい力」は？

それでは、ワークショップの本題に入ります。学校図書館の授業活用のアイデアを作っていくためには、「学校図書館の活用を通して育てたい力」を設定していくことが必要です。

それぞれが日々の教育現場において肌で感じていること、教育をめぐる諸問題、今の社会、そして、これからの社会のこと、様々な視点から集められた情報をもとに、あなた自身が考える「学校図書館の活用を通して育てたい力」を設定してみましょう。

資料5-2 ワーク② みんなで「育てたい力」は？

次に、チームで共有します。ふせんに書いたことを1枚1枚、説明しながら模造紙に貼ってください。同じこと・似たようなことが書かれたふせんをまとめながら、チームのメンバーが「育てたい」と思っている力の全体像を整理してください。

ふせんが出そろったら、チームとしての合意をつくります。チームのメンバーが「そうだ！私たちが育てたい力はこれだ！」と思えるものを導き出してください。

資料5-3 ワーク③ あなたの役割は？

私たち教師は、学校の中で大きく3つの役割をもっています。1つめは「教科」です。2つめは「学年・学級」です。3つめは「校務分掌」です。私たちはこれらの役割を絶妙に切り替えながら、あるいは、同時に遂行しながら、いそがしい毎日を送っています。

「みんなで育てたい力」が設定できたところで、役割分担を行います。「育てたい力」を育てるためには、自分が担っている役割からの具体的なアプローチが必要になるからです。

今回のワークショップでは、「教科」と「学年・学級」は、現在での役割をそのまま使います。

※「校務分掌」は、今回用いません。

資料5-4 ワーク4 具体的な行動は？

チーム内での役割が決定したら、ワークショップも仕上げの段階に入ってきます。ここからは「育てたい力が発揮されたときに見られる（子どもたちに期待したい）行動」を具体的に設定していくワークです。

ここでの大切なポイントは「見える化・言える化・越える化」です。

「育てたい力」や「具体的な行動」は、教師が理解しているだけでは十分ではありません。子どもたち自身が理解してこそ、意味のあるものになります。そのためには、「子どもたちへの伝え方」が非常に重要になってきます。つまり「育てたい力」や「具体的な行動」をきちんと「見える化」し、教師と子どもたちがともにそれらについて「言える化」できる環境をつくることが重要なのです。それができれば、ある特定の場面だけでなく、様々な場面において「育てたい力」や「具体的な行動」が意識され、実行されていく（＝越える化）可能性がぐっと高まっていきます。

今回のワークショップでは、次のような形で「見える化」することに挑戦します。

- タイトルを表すイラストを描く。
- 覚えやすいタイトルをつける。
- 「こんなときには、こうしてみよう」と期待したい行動を文章で表現する。

自分の役割から見たとき、「育てたい力」が発揮されたときに見られる（期待したい）のはどのような行動でしょうか。

資料5-5 ワーク5 どの教科の学習で実施する？

「育てたい力」を設定し、「育てたい力」が発揮されたときの具体的な行動を見える化できれば、学校図書館の活用のスタートまであと一歩です。

最後の一步は、どの教科のどんな学習（単元）で学校図書館を活用するかを具体的に決めることです。せっかく立てた計画も、私たち教師が実行に移されなければ「絵に描いた餅」になってしまいます。

どの教科のどんな単元で活用するかが決まれば、スケジュールの調整を図ることで実行可能です。